

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：32652

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370310

研究課題名(和文)世界シェイクスピア超言語上演の意義と可能性

研究課題名(英文)Translingual Performance of Shakespeare Worldwide: Challenges and Possibilities

研究代表者

浜名 恵美 (HAMANA, EMI)

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：20149355

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：世界シェイクスピア超言語上演(Translingual Performance of Shakespeare Worldwide)の意義と可能性の解明に取り組んだ。世界的にもまだ新しく、特に日本では遅れている超言語実践(translingual practice)研究の立場から、世界各地で行われているシェイクスピア上演について、その意義と可能性を理論と実践の両面からある程度まで解明することができた。3年間で、世界シェイクスピア超言語上演研究に資する貴重な実例を見出すと同時に、今後の世界シェイクスピアをととした超言語上演の理論と実践に有意義な提言を行うことができた。

研究成果の概要(英文)：This study tried to elucidate "Translingual Performance of Shakespeare Worldwide: Challenges and Possibilities." Although the research of translingual practice is still unfamiliar in Japan, this study was able to clarify, to some extent, the challenges and possibilities of translingual performances of Shakespeare plays in the world. In three years, this study found valuable examples that contributed to Shakespeare translingual performances worldwide, and it also was able to make effective proposals for the theory and practice of translingual performances for future world Shakespeare.

研究分野：シェイクスピア研究

キーワード：超言語実践 超言語理論 超言語上演 世界シェイクスピア上演

1. 研究開始当初の背景

本研究は、特に、平成 23 - 25 年度の科学研究「世界シェイクスピア上演をとおした異文化理解教育」の発展を目指した。

(1) 国内・国外の研究動向及び位置づけ

演劇・パフォーマンスの分野ではインターカルチュアリズム(interculturalism)の立場からの理論と実践に関して、その可能性と課題について実験的上演と批判的研究が行われてきた。しかし、超言語実践の立場からの研究はほぼ皆無であると言ってよく、本研究が実質的に先駆となった。シェイクスピア演劇をとおした超言語実践研究は新しい分野の開拓に挑むものであり、それを日本の研究者が中心となって研究し、その成果を国際的に発信していくことの意義は大きい。

超言語上演の意義と動向 Suresh Canagarajah, *Translingual Practice: Global Englishes and Cosmopolitan Relations* (London and New York: Routledge, 2013)が指摘したように、超言語(translingual)という術語は、言語教育におけるパラダイム転換となる二つの主要概念を強調する。第一に、コミュニケーションは個々の言語を超えて実践されるということ。第二に、コミュニケーションは言葉を超えて実践され、多様な記号論的リソースや環境的アフォーダンスに関わるということ。多言語主義の場合、概して、複数言語の共存が強調され、言語間の動的相互作用が重視されていなかった。超言語実践研究が注目するのは、言語間の接触であり、私たちが生きている超言語的現実である。超言語上演研究では、超言語的現実を舞台に再現表象するだけでなく、私たちが通常は意識していない深い現実の表象・創造・出現が要請・期待される。

世界シェイクスピア上演の意義と動向

世界シェイクスピア会議が、1971年の第1回から、世界各地の上演に注目し、今日では“World Shakespeares”という研究領域が定着し、特に欧米とアジアの研究者が研究を推進している。また東アジアの研究チームが、欧米中心主義の是正を目指して、2010年からA|S|I|A (Asian Shakespeare Intercultural Archive)で英語・中国語・日本語・韓国語の字幕付でアジアの上演の録画の保存・公開を行っている。またデータ分析・公開の取組みにも着手した。シェイクスピア上演の「本場」とされるイギリスでも今日では、世界各地の劇団、演出家、俳優等を招聘している。2016年に開催された第10回世界シェイクスピア会議(開催地: 連合王国ストラットフォードと

ロンドン)のために、本研究の代表者は、イスラム圏と東欧のシェイクスピア研究と上演研究者の参加を含めたパネル・ディスカッションを計画した。

(2) 着想にいたった経緯(従来の研究成果をふまえて)

本研究を着想した直接の要因は三つあった。第一に、平成23 - 25年度の科研の3年目に予定していた国際シンポジウムが、日本政府の尖閣列島国有化宣言により中国で発生した激しい反日運動の影響のために、平成24年10月に北京で開催予定であった日中共同公演『リア王』の中止という全く不測の事態により、実現不能になったために、今回は研究題目を最新化し、国際学会の開催を実現させたいという強い思いがあった。第二に、平成24年度にロンドン・オリンピックと同時開催されたシェイクスピア・オリンピックの一環であるグローブ座のGlobe to Globe 2012(シェイクスピアの37作品を世界各地から招聘した劇団が37言語で上演)という行事(の一部)を現地調査し、空前絶後の多言語・多文化上演に大きな衝撃を受けたことである。第三に、科研の成果としてまとめた『文化と文化をつなぐ: シェイクスピアから現代アジア演劇まで』(筑波大学出版会、2012年9月)の第六章で論じた鈴木忠志演出四カ国語版演出『リア王』を代表として世界各地で行われている多言語上演に関して、超言語実践という概念を導入することにより、新たな意義と可能性を見出せると認識したことである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、世界シェイクスピア超言語上演(Translingual Performance of Shakespeare Worldwide)の意義と可能性を解明することであった。世界的にもまだ新しく、特に日本では遅れている超言語実践(translingual practice)研究の立場から、世界各地で行われているシェイクスピア上演について、その意義と可能性を理論と実践の両面から解明する。本研究の具体的目的は、3年間で、世界シェイクスピア超言語上演研究に資する多様な実例を見出すと同時に、今後の世界シェイクスピアをとおした超言語上演の理論と実践に有意義な提言を行うことであった。

3. 研究の方法

主要な方法は、超言語上演に資する国内外のシェイクスピア上演の実地調査、国内外の関連学会への参加と研究者との意見交換、インターネットを含めた情報収集、映像資料分

析、文献調査、3年目に計画した第10回世界シェイクスピア会議におけるパネル・ディスカッション「世界シェイクスピア超言語上演」の開催であった。

4. 研究成果

(1) 平成26年度の研究成果

平成26年4月19日、日本シェイクスピア協会・日本英文学会共催シェイクスピア祭で招聘公演「シェイクスピアの面白さ：超言語的想像力、超言語的实践に注目すると」を行い、本研究課題の意義と可能性を紹介した。

6月10-14日にパリに出張し、オン・ケン・セン演出の *Lear Dreaming* の上演調査を実施した。

8月、ロンドンに出張し、グローブ座を中心として、シェイクスピア作品の上演の調査と研究を行った。

10月11日、第53回日本シェイクスピア学会のセミナー1：Shakespeare Performance Worldwide: From Multilingual to Translingual Performance のコーディネーターを務めた。アメリカ、ポーランド、インドからの3名の著名な研究者を招聘し、海外でも活躍している3名の日本人研究者を含めて、本研究課題に関するセミナーを英語で行った。

10月26日から11月14日まで、平成26年度日本学術振興会外国人招へい事業（短期）に採択され、カリフォルニア大学アーヴァイン（総長）教授ブライアン・レノルズ氏を招へいした。演劇理論家、シェイクスピア研究者であるレノルズ教授に講義、ワークショップ等を実施していただき、またシンポジウムと一部の現地調査を共同で行い、本研究課題を発展させることに資した。

11月8日、国際シンポジウムを開催した。題目：Transversal Poetics from Shakespeare Theater to Contemporary Performing Arts and Film。会場：筑波大学。レノルズ教授をメイン・スピーカーとして、演劇研究者と映画研究者が集まり、英語でシンポジウムを実施した。横断の詩学という最先端の演劇・パフォーマンスの理論を我が国に紹介する機会となっただけでなく、本研究課題を発展させるために大きな刺激となった。

(2) 平成27年度の研究成果

4月にインドの国際学会で蜷川幸雄演出歌舞伎版『十二夜』に関する発表を行い、研究課題の成果を公表することができた。

6月に国際英語正教授学会 (International Association of University Professors of English: IAUPE)に、ポーランドと日本の推薦

者2名の協力を得て入会し、国際的に著名な研究者と交流する機会の増加を図った。平成28年7月末に開催される学会のシェイクスピア部門で日本の上演について発表することになった。

8月はロンドンと SCOT Summer Festival (利賀)で上演研究を実施した。アメリカ、ポーランド、レバノン等の研究者と連携して、第10回世界シェイクスピア会議 (World Shakespeare Congress) のパネルの準備を推進し応募した。遺憾ながら、応募数が非常に多く不採択であった。善後策として、本研究に資するセミナー、“*King Lear and its Versions*” に応募し、すぐ採用された。平成27年度は、シンガポールの演出家オン・ケン・セン演出 *Lear Dreaming* に関する発表論文の執筆準備を進めた。特に、超言語実践を構成する記号論的リソースと生態的（環境的）アフォーダンスの后者の重要性を痛感した。日本の英語圏文学研究では演劇研究の分野でも、いまだにテキスト分析が主流であり、欧米で台頭している scenography(装置、音楽、照明、衣装、コンピュータ・グラフィックス等を含めた舞台芸術のデザイン)への認知心理学、脳科学、現代思想等を取り入れた研究が著しく「遅れている」ことに気がついた。そのため、生態学的アフォーダンスの分析を重視した論文の執筆を進めた。

項目を分担執筆した *The Cambridge Guide to the Worlds of Shakespeare*, 2 vols. (2016)が出版された。

(3) 平成28年度の研究成果

7月25-29日に開催された IAUPE の国際学会 (3年毎に開催、平成28年度開催校：ロンドン大学) のシェイクスピア部門で口頭発表を行い、7月31日 8月6日に開催された第10回世界シェイクスピア会議 (10th World Shakespeare Congress, 5年毎に開催、平成28年開催地：連合王国ストラットフォード・アポン・エイヴォンとロンドン) の『リア王』の翻案に関するセミナー (Leaders: Michael Neill, Abigail Robinson-Woodall, David Schalkwyk) にメンバーとして参加し、超言語実践の観点から有効なシェイクスピア上演のあり方についてその時点で最善の総括を

行くと共に認知学的アプローチの必要性についても言及した。2つの国際学会における発表論文は、それぞれアメリカとチェコの学術雑誌に掲載された。

出版が遅れていた Multicultural Shakespeare (出版国・ポーランド)が出版され、論文が公開された。

本研究課題「世界シェイクスピア超言語上演の意義と可能性」の遂行中に執筆した論文を中心とする論文集を平成29年度中に出版する準備を進めている。

平成29年1月7日に開催された早稲田シェイクスピア・フェス、シンポジウム「アジアのシェイクスピア シェイクスピア受容の多様性」において基調講演「アジア・シェイクスピアの上演・研究の現在 シェイクスピアのアジア、アジアのシェイクスピア」を行った。超言語上演の意義だけでなく、本研究を進める過程で認識するにいたった認知学的アプローチ、デジタル・ヒューマニティーズ、今後の人文学研究のあり方などへの発展的な提言を行った。

(4) 3年間の成果の総括

本研究の主要な成果としては、以下の3点をあげることができる。

英語論文5本、英語口頭発表5本、日本語口頭発表5本、英語図書(分担執筆)1本、日本語図書(分担執筆)1本。合計17本。

海外調査・学会出張(連合王国3回、フランス共和国1回、インド共和国1回) 国内出張(富山県、静岡県)による実地調査。

(注) 自費等による出張を含む。

英語のホームページの維持

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

December 2016. Emi Hamana, “Performing Shakespeare in Contemporary Japan: The Yamanote Jijosha’s *The Tempest*,” *Multicultural Shakespeare: Translation, Appropriation and Performance*, 14.29, pp.73-85. DOI: 10.1515/mstap-2016-0017 審査付

December 2016. Emi Hamana, “Translingual Performance of *King Lear*: *Lear Dreaming* as a Case Study,” *Litteraria Pragensia: Studies in Literature and Culture*, Prague: Charles University, 26.52, pp.90-105. 審査付

5. March 2017. Emi Hamana, “Last Shakespeare Plays Directed by Yukio Ninagawa: Possessed by the Power of Theater,” *Journal of Literature and Art Studies*, 7.3, pp.269-277. DOI:10.17265/2159-5836/2017.03.004 審査付

6 March 2017. Emi Hamana, “Toward a Study of Translingual Performance of Shakespeare Worldwide with a Focus on *Henry V*,” *Essays and Studies in British and American Literature*, 63, pp.41-64.

March 2017. Emi Hamana, Performance Review. “*Sandaime Richard*, written by Hideki Noda and directed by Ong Keng Sen,” *Shakespeare Studies*, 54, pp.40-43. 審査付

[学会発表](計10件)

浜名恵美「シェイクスピアの面白さ - 超言語想像力、超言語的实践に注目すると」。日本シェイクスピア協会・日本英文学会共催シェイクスピア祭(招聘講演)。2014年4月19日。学習院大学(東京都豊島区)。

Emi Hamana (Coordinator), Seminar 1: Shakespeare Performance Worldwide: From Multilingual to Translingual Performance. 第53回日本シェイクスピア学会、2014年10月11日。学習院大学(東京都豊島区)。

Emi Hamana (Symposium member), “Transversal Poetics from Shakespeare to Contemporary Arts and Film.” 外国語センター主催学術・文化振興公開シンポジウム、2014年11月8日、筑波大学(茨城県つくば市)。

Emi Hamana, “A Kabuki Version of *Twelfth Night*, Directed by Yukio Ninagawa Reconsidered in Terms of Transversal Poetics”, invited lecture, International Conference on William Shakespeare and Kuvempu, 2015年4月23日、Karnataka, India.

浜名恵美「現代日本シェイクスピア上演の面白さ - 世界シェイクスピア上演の立場から」。早稲田大学演劇博物館主催2015年度シェイクスピア祭演劇講座(招聘講演)。2015

年 5 月 15 日。早稲田大学早稲田キャンパス
(東京都新宿区)

浜名恵美「越境する劇作家・演出家・平田
オリザ 国と地域の境界から人間とロボ
ットの境界まで」。比較理論学会 2015 年度年
次大会(招待講演)。2016 年 2 月 20 日。筑波
大学筑波キャンパス(茨城県つくば市)

浜名恵美「世界シェイクスピア研究の最
新動向について」。大塚英語教育研究会(招
待講演)。2016 年 7 月 6 日。筑波大学東京
キャンパス(東京都文京区)

Emi Hamana, "Last Shakespeare Plays
Directed by Yukio Ninagawa: Possessed by the
Power of Theatre," Shakespeare 4:Shakespeare
in Global Performance, International
Association of University Professors for
English Triennial Conference, at the Institute
of English Studies, School of Advanced Study,
London University. 2016 年 7 月 26 日。ロン
ドン大学(連合王国、ロンドン)

Emi Hamana, Seminar in *King Lear* and its
Versions, 10th World Shakespeare Congress,
Shakespeare Centre in Stratford-upon-Avon.
2016 年 8 月 1 日。(連合王国、ストラット
フォード・アボン・エイヴォン)

浜名恵美「アジア・シェイクスピア上演・
研究の現在 - シェイクスピアのアジア、ア
ジアのシェイクスピア」。早稲田シェイク
スピア・フェス(招待講演)。2017 年 1 月
7 日。早稲田大学大隈小講堂(東京都新宿
区)

〔図書〕(計 2 件)

Emi Hamana, "Shakespeare in Quotations in
Japanese," *The Cambridge Guide to the
Worlds of Shakespeare*, ed. by Bruce R.
Smith, 2 vols. Cambridge: Cambridge
University Press, 2016. Vol.2. 総ページ
数: 2248 . pp.1704-1706.(項目分担執筆、
単著)

浜名恵美『異文化理解とパフォーマンス -
Border-Crossers』。2016 年、春風社。全 502 ペ
ージ。分担著「はじめに」pp.4-6.

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等
<http://www.emihamana.net>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

浜名 恵美 (HAMANA, Emi)
東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号: 20149355

(2) 研究協力者

楠 明子 (KUSUNOKI, Akiko)
東京女子大名誉教授